別記第３号様式

平成１８年度　事後評価調書

機 関 名　アイヌ民族文化研究センター
研究責任者　研究課長　古原　敏弘
研究担当者　研究職員　澤井　春美

課題番号	ア文研一般1808	研究課題名	十勝地方のアイヌ語の調査研究（基礎語彙）					
課題担当者	1　人							
共同研究機関（協力機関）		研究区分	研究	試験	調査	分析	研究期間	7年度～ 17 年度
							全体所要額（千円）	3,956（一財　3,956　）

研究の概要	○研究背景 ・十勝地方のアイヌ語は、研究成果も研究資料も少ないため、その基礎資料から収集を行う必要がある。そこで、日常会話の中で比較的使用頻度が高い単語（基礎語彙）について調査・分析を行う。なお、十勝地方のアイヌ語話者は少数で、かなりの高齢であることから、この調査は緊急を要する。 ○研究目的 ・十勝地方のアイヌ語の基本単語の収集とその分析により、基礎資料を作成する。 ○研究内容 ・聞き取り調査による基本単語の収集と、他地域の資料と比較対照することにより基本単語の分析を行う。 ○研究実績 ・平成 7～13年度：本別町にて聞き取り調査を行い、本課題の研究資料となる基本単語を採録するなど当初の目標を達成した。 ・平成14～15年度：採録資料の整理を行ったが、整理作業に遅れが生じた。 ・平成16～17年度：帯広市にて聞き取り調査を行い、基本単語のとりまとめに向けた採録資料の最終整理を行った。
直近の研究課題評価結果 平成 15 年度 中間 評価 【自己評価】Ａ・Ｂ・Ｃ 【総合評価】Ａ・Ｂ・Ｃ	
研究の成果	○具体的な成果及び研究目標の達成度 （成果の有益性【ａ・ｂ・ｃ】） （目標の達成度【ａ・ｂ・ｃ】） ・約2000語の基本単語と各単語が用いられる例文を採録し、それぞれの単語の発音と意味を調査した。また、先行研究との比較対照及び分析を行うなど、研究目的を達成した。 　さらに、研究成果のとりまとめとして平成18年8月に調査報告書を公刊する予定であり、アイヌ語の基礎資料を整備するという当初の研究目標を達成した。 ○研究期間・経費の妥当性 （期間の妥当性【ａ・ｂ・ｃ】　　経費の妥当性【ａ・ｂ・ｃ】） ・平成14～15年度には整理作業に遅れが生じたことから期間を2年延長した。ただし、本課題の聞き取り調査の対象となるアイヌ語話者が高齢であり一回の調査時間が長くとれないことから予定より長い期間を要したものの、研究期間と経費は概ね妥当であった。 （○他機関との連携） ・ 調査にあたっては、 帯広百年記念館の協力を得た。
成果の活用策	○活用される分野 ・本研究により、研究資料が乏しい十勝地方のアイヌ語の基礎データが明らかになることから、成果は伝承活動やアイヌ語学習等での活用が期待できる。また、他地域のアイヌ語研究にも大きく寄与することが期待される。 ○具体的な活用方策、新たな展開に向けた課題（活用の可能性【ａ・ｂ・ｃ】） ・平成14年度から研究を開始している「十勝地方のアイヌ語の調査研究（文法・助詞）」の参考資料とする。 ○研究成果の普及 「アイヌ語十勝方言の親族名称について」『北海道立アイヌ民族研究センター紀要』第7号、2001年 「アイヌ語十勝方言の人称接辞 'a-, 'an- の出現状況と例外的事例について」『北海道立アイヌ民族研究センター紀要』第11号、2005年 『アイヌ語帯広方言の資料：田村すゞ子採録　広野ハルさんの基礎語彙調査資料』（田村すゞ子と共編）札幌学院大学、2005年 『アイヌ語十勝地方の基礎語彙集―本別町沢井トメノのアイヌ語』（仮）2006年8月（予定）

【自己評価】 Ａ・Ｂ・Ｃ	【説　明】 本課題により、十勝地方のアイヌ語資料の収集が行えたことで、基礎資料の充実が図られ、平成18年度には報告書を作成することでアイヌ語学習等への活用が期待され、さらに文法研究への展開へと繋ぐこともできた有意義な研究であった。 追跡評価の必要性　有・無
【総合評価】 Ａ・Ｂ・Ｃ	【意　見】 十勝地方のアイヌ語の基本単語の収集について目標を達成し、十分な研究成果が得られている。なお、本研究は基礎資料の作成を主目的としていることから、追跡調査は実施しない。 追跡評価の必要性　有・無

(Ａ)目標を達成し、十分な研究成果が得られている
(Ｂ)目標を概ね達成し、一定の研究成果が得られている
(Ｃ)目標の達成度が低く、十分な研究成果が得られていない

(ａ)極めて高い、適切である
(ｂ)高い、概ね適切である
(ｃ)低い、改善の余地がある